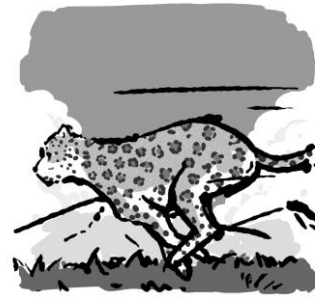


十一月のテーマ

積極的に生きる



え・城谷俊也

働き(積極心)の原動力は？

今

年の八月、山口県で行方不明になり、安否が心配されていた二歳児をたちどころに見つけて、その名が一躍知られるようになった尾嶋春夫さん。テレビでは連日、尾嶋さんの人となりや、これまでの被災地での活動ぶりが紹介されました。

時間を忘れて、黙々と作業を続ける姿に、尊敬と畏敬の念を込めて、いつしか尾嶋さんは「スーパードランティア」と呼ばれるようになりました。作業現場での食事時、涙ながらにお礼を言う姿からは謙虚さがにじみ出ています。

「かけた情けは水に流せ。受けた恩は石に刻め」という座右の名が示す生き方は、まさに尾嶋さんの心に宿る、利他の精神を象徴していると言えるでしょう。

では、身を粉にしてボランティア活動に従事する、尾嶋さんの心を突き動かしている原動力はどこにあるのでしょうか。

尾嶋さんは事あるごとに、早くに亡くなったお母様への強い思慕を語っています。

「もう七十八歳になるけど、おふくろに思いっきり抱きしめてもらいたい。そして、頭を撫でてほしい」「今やっていることも、行動も、言葉も、全ておふくろは、じつと私のことを見てくれている」

が自ずと積極的になっていきます。このことは、私たちが毎週のモーニングセミナーで読んでいる『万人幸福の葉』の一文からも学ぶことができます。

そして、仏壇の遺影に手を合わせながら、昔日の実母の姿をいつも思い描いているといいます。

大衆の重畳堆積幾百千乗の恩の中に生きているのが私である。このことを思うと、世のために尽くさずにはおられぬ、人のために働かずにはおられない。(第十三条より)

自分という存在を生み育ててくれた母への感謝を胸に、へきつとおふくろなら、人世のために働く姿を認めてくれ、褒めてくれ、応援してくれるに違いない」という思いが真心からの働きにつながっているのかもしれない。

私たちはつい目先の利益や一時の成功を求めてしまいがちです、また、そのために積極的に活動したり、努力を惜しまないものです。しかし、それが「自分のためだけ」の働きであるなら、上辺だけの積極心とも言え換えられるでしょう。本当の意味での真心の働きとは言えないかもしれません。

翻って、私たちの人生において、心の奥底に眠っている積極心が発揮されるのはどのような時でしょうか。そこには「恩の自覚」があるはずで、

「人の喜びこそわが喜び」としている人の姿は、積極心に満ちた生き方を私たちに教えてくれます。日々の行動を突き動かす原動力、「受けた恩を石に刻む」が如く今あることへの感謝を深めていく時に、本当の意味での積極心が発動されていくのでしょうか。